
君と西瓜とバスケットボールと

日向葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と西瓜とバスケットボールと

【Nコード】

N2589D

【作者名】

日向葵

【あらすじ】

小玉瓜子はいたって普通の女の子。天敵、吉田広人に振り回されっぱなしの毎日だが、彼の本当の気持ちを知って気持ちが動かされ…。一生懸命な女の子の体当たりラブストーリー！。

1・コロッケ

「おっす、児玉。あいかわらず、すつとぼけた顔してんな。」

でた、疫病神。

私の露骨に表した嫌な顔をもろともせず、奴はちゃっかり隣に座ってきた。

「お。旨そう。そのコロッケくれ。」

だめ!と言った時には、すでにコロッケの形は跡形もなく、奴の口の中に収まれてしまっていた。

450円のコロッケ定食はうちの高校の名物で、昼ともなれば食券が売切れてしまうほどの人気ぶりだ。

全て手作りで作っているらしく、揚げたてのコロッケは、ほくほくとしていて口の中でのいもの食感が少し残る。

今日はひさしぶりに食べるから、楽しみにしてたのに…。

涼しげな顔をしている奴を、涙目で睨んだ。

「あほっ!!あほ吉田っ!!まだ食べてないのにっ!!」

「ばっか。まだあと一個残ってるだろ?」

口をまだもごもご動かしながら、無関心そうに奴はいう。

この、まぬけっ!!1個はあつあつを食べて、もう1個は味わいながらゆっくり食べるのが、あたし流なのよ!!

あまりにむかついたから、大事なもう一つのコロッケを食べられな
いようにお皿を抱えて、奴に背を向けた

「ガキ。思考が乏しいんだよ、お前は。」

背中ごしに、奴の声が聞こえる。

ふん。なんと言われようが、知らないもんねーだ。

しばらく、静かだった。

後ろを見ないから分からないけれど、もう吉田はどこかに行ったの
かもしれない。

少し安心して、食べかけのコロッケの続きを…と思ったとき、

「ふぉ〜」

いきなり、耳もとに生あたたかい息がかかった。

「うおおおおおおおおおつっつ！……！！！！！！！！」

全身に鳥肌が立った。

真っ赤になって耳を押さえ、勢いよく立ち上がった瞬間……。
目の前のコロッケが綺麗さっぱり、消えていた。

やられたっ！あんにやろう！！

「児玉ちゃんは、感じやすいねえ。」

1〜2M離れた所から、奴はポケットに手を通り込みながら口をもごもご動かし、にやにやと笑って去っていった。
隣で一緒に食べていた香織が、頬杖をつきながら呆れた視線を私に向ける。

「あんたらって…ほんつとガキ。」

あたしは言い返す事が出来なくて、キャベツとトマトしか乗っていない寂しげなお皿に目を落とした。

絶対許さないんだからっつ！！！！！

1・コロッケ（後書き）

お久しぶりです。

書き溜めBOXにあった昔作ったお話なので、ちょっと恥ずかしいのですが、なんとか手直ししながら書いてみます。どうぞ長い目で見守って下さい（汗）

2・早起きは三文の得？

高校入学したてで、クラス全員の名前もまだ覚えられなかった頃、一人だけ誰からも記憶される名前の人物がいた。

それが、吉田広人だった。

隣のクラスから、わざわざ覗きに来る子も少なくなかった。

それほど彼の容姿は際立って目立っていた。

奴は、いわゆる“もてる”人種だ。

すらりと伸びた背、さきつぽがクルツとくせ毛つぽくなっている薄い茶髪の短い髪、人を射抜くような真っ直ぐな瞳、意志の強さをあらわしているのか、きゅっと結ばれた唇。

容姿端麗とはまさにこのことだ。

私自身、最初は驚き、ただただ彼を眼で追っているばかりだった。

校内中、彼の噂で持ちきりとなってしまう、かわいい女の子に呼び出しをくらす事もしばしばあったようだ。

そのうち、来るもの拒まず去るもの追わずの非情な極悪人根性がバシ始め、噂もひと段落し、私の心の中でも「タラシ」という位置に無事ランクされ、同じクラスだということも全く意識しないようになっていた。

このままで行けば、凡人の私と吉田広人とはクラスメイトという関係だけで終わるはずだったのだ。

けれど、あの日から運命が変わった。

その日は珍しく、早く学校に行ったのだ。

あんまりに気持ちのいい朝だったから、「早く行って読書でもしますかね」なんて軽い気持ちだった。

と、クラスのドアから、走り去っていく女の子と鉢合わせになった。どうやら、隣のクラスの女の子みたいだ。

通り過ぎるときにちらっと見やると、その子の眼から涙があふれているのに気づいた。

(何かあったのかな?)

疑問符を浮かべながら教室のドアに手をかけ勢いよく開けると、思いもしなかった人物が視界に入ってきた。

それは、窓際にぼんやりたたずむ、吉田 広人の姿だった。

「おはよ。」

彼は一瞬驚いたような表情をしたが、私だとわかるとボソツと呟いた。

風に吹かれた髪がクルクルとなびき、朝日をつけて眩しそうに瞳を細める姿が、妙に綺麗だった。

「児玉サン、早いね。」

びっくりした。

一度も話したことないのに、まさか名前を覚えていてくれるとは思わなかった。

「よく、私の名前知ってるね。」

気づいたら、思わずこんなことを口走っていた。

「兎玉 瓜子って名前、なんかスイカっぽいだろ？だからなんとなく覚えてたんだよ。」

そういって、奴はいたずらっぽく笑った。

(へえ。こんな笑い方もできるんじゃない、コイツ。)

いつものヘラヘラ媚びたような笑い方よりよっぽど彼に似合っていた。

(にしても、“スイカ”っていうのはないでしょ？)

少しむっとしながら、今度は落ち着いて言葉を搜した。

「何やってるの?」

「知ってるくせに...」

にやつと意地悪そうに笑った顔を見て、さっきの場面を思い出す。泣きながら逃げるように走り去ったあの娘。そして、こんな朝早くから教室に一人でいる“モテる男”。考えられるのは、一つしかない。

「なんで、児玉サンはこんなに早いの？」

私が考え込んでいた間に、今度は奴から質問された。

「アンタに関係ないでしょ。」

吉田は、きよとんとしていた。

そして、唐突に笑い出した。

「やっぱり、児玉サンっておもしろいわ〜。」

何がおかしいのだろう。

正直な気持ちを言ったのに笑われて、私は大いに心外だった。

あんまりおかしそうに笑うから、睨みつけてやったら、笑みを顔に残したまま話しかけてきた。

「さっきの女の子、かわいいと思う？」

「さあ。」

「付き合った方がいいかな？」

「いいんじゃない？」

「児玉サンは、好きな人いるの？」

「別に。」

「じゃーね。」

そう言っていると、奴はしゃがみこみ、私の顔の位置に視線を合わせた。陰が出来るほど長いまつげが、目の前で瞬く。

「兎玉サンの事、利用させてくれない？」

そう言われて、私は必死にその意味を考えていたとき、急にドアが開いた。

ガラッ

「おっはよーっ！！で、まだ誰もいないか…っ！！？」

朝練を終えて一番に乗り込んできた陸上部の女の子は、そのまま口をあけて固まってしまった。

吉田広人に、しかと抱きしめられてしまっている私という非常にマズイ状態を目撃しながら…。

2・早起きは三文の得？（後書き）

なんだか恥ずかしくなってきました…ベタバタ展開王道ですね…。

3・放課後の体育館（上）

運悪く、見つかった相手が校内で有名なおしゃべり好きだったため、またたく間に噂は広がった。

おまけに、あの後私がすばらしい平手打ちをくらわしたため、彼の左頬は赤く腫れ上がってしまい、それがまたさまざまな憶測を呼んだ。

「あの吉田広人が、実は兎玉瓜子と付き合ってた。」

「朝から、二人でこっそりデートをしていた。」

夕チの悪いのだと、

「放課後の教室で、二人で最後までやった。」だの

「隣のクラスの三沢（どうやらあの日の女の子らしい）とドロドロの三角関係だ。」

とかなんとか…。

おかげで、吉田広人ファンからは呼び出しくらうわ、下駄箱に剃刀いりの封筒が届くわで、散々な目にあっただの。

女の子達の標的は私に集中したため、その間奴は随分のんびりと過ごしていたようだ。

利用するってこういうことだったのかと、むかつくやら情けないやらで、しばらくは吉田恐怖症に陥った。

その噂も少しずつ収まっていった頃、不覚にも私と吉田はすっかり公認カップルとなってしまうた。

幸か不幸か（もちろん不幸だ！）、3年間クラス替えなしが特色の我が校のため、奴とは嫌でも顔を合わしてしまうし、奴もまた全く反省の色を見せず話しかけてくる始末。

そんなこんなで、ズルズルと2年生になった今でも公認カップルぶりは相変わらずで、吉田には迷惑をかけられまくっていた。

「あんたもつくづく不幸よね。」

肩ほどまでもある綺麗な黒髪をかきあげながら、香織が沈んでいる私の頭を軽くポンポンとたたいた。

放課後、例によって吉田ファンの女の子に別れてくれと詰め寄られていたのだ。

1つ年下のその子は、それなりにみれる顔を鬼のように変化させ、かわいい口から尖らして、とんでもない言葉を発した。

「児玉先輩は、吉田先輩に釣り合いませんっ！！！」

慣れているとはいえ、傷つく言葉は何度言われても傷つく。

すっかりしょげている私をいつものように香織が慰めてくれているところだ。

「もう嫌。あんな男、大嫌い！」

机にうつ伏せている私に、香織の大きな溜息が聞こえてきた。

「吉田ってさ、本気で誰かと付き合ってるところ見た事ないんだよね。誰とでも話すんだけど、誰とも心から打ち解ける事はしないって感じ。どこか一線置いてるっていうか…。誰と付き合っても長続きしないし。本当に好きな人がどこかにいるのかも知れないね。」

「…そうだとしても、あたしには関係ないよ。ほんっと最低！あの噂で人がどれだけ苦労してきたことか…。」

「はじめて、男の子に抱きつかれて動揺しちゃったしね。」

「そ、そんなんじゃないっ!！」

慌てて否定すると、香織がにやつと意味ありげに微笑む。

香織は知ってるんだ。私が男というものに全く免疫がないことを。

男の人に抱きしめられたのは、悲しいかな、あの時が初めてだった。

不覚にも吉田に抱きしめられた時、非常にドキドキした。

奴のシャツからは太陽のにおいが微かにし、密着した肌からは奴の体温が感じられた。

1秒がすごく長く感じられた。

心臓の音を聴かれまいと懸命に自分の胸を押さえているのが精一杯だ。

思い出したら、顔が熱くなってきた。

そんな私の顔を不思議そうにのぞきながら、香織は再び口を開く。

「私さ、結構、吉田は児玉のこと気に入ってるんだと思うよ?」

なんて事を口走るんだ、この娘は?

思わず、ポカンと口があいた。

「なんだかんだいって、あんたの事よく構うし。それにね。あんなという時が一番楽しそうなのよ。」

「あゝほっ!そんなわけないでしょ!?アイツはめんどくさい女関係から逃れるために、私という“身代わり”を立てたの!彼女と

いう名目の人がいれば、奴のファンだって黙っているしかないでしょ？ほんとうまく利用しただけなんだから！」

「それはそうなんだけどさ。」

香織は、鼻息荒い私を横目に再び溜息をついた。

「おいつ、児玉、池田！！！」

いきなり声がして、驚き後ろを振り向くと、担任のサトセンだった。サトセンの本名は、佐藤武^{さとつたけし}、45歳一児のパパだ。少し薄くなった頭がこの季節妙にさみしげだったが、生徒からは割りと好かれているお茶目な先生だった。

「お前ら、まだいたのか？」

何をしてたんだ？といういぶかしげな視線を感じ、慌てて席を立つ。

「もう、帰るところです〜！」

「いんや、丁度いい。児玉！お前、吉田にこれを渡してくれ。」

そう言って、紙袋に入った何やら角ばった四角いものを渡された。

「ちょ、ちょっと、なんで私なんですか！！？」

「ほら、だって、あれだろ？お前、吉田の彼女なんだから？」

… やっぱり、そうきたか。

「あれは、デマです！何を聞いたか知らないけれど、全くの嘘話ですっ—！」

「そう向きになるな。おれは良いコンビだと思うぞ？心配してたんだ。吉田は、見てくれはいいけど、あんな奴だろ？でもお前みたいなしつかり者が相手じゃ安心だな。いや、若いっていいなあ。俺も後20年若かったらなあ…。」

「こりゃ、だめだ。完全に瞳がキラキラして、どこか遠くに行っちゃまっている。」

香織と眼が合い、二人して肩をすぼめ合った。

3・放課後の体育館(上) (後書き)

やっと話が動きだしました…かな(汗)

4・放課後の体育館（下）

「なあって、私が…。」

こんなの不条理だ。だいたい先生にまで広がっているのか、あの噂は…。

思わず寒気がした。

（はあ。どうなっっちゃうのかな。私の高校生活…。）
ぶつぶつ呟きながら体育館に向かう。

サトセンが、吉田は体育館にいるはずだと教えてくれたのだ。

知っているなら自分で行けよと悪態をつきながら、仕方なくとぼとぼと歩いた。

香織はさっさと退散してしまったから今は一人だ。

一人ではの暗い学校にいるのは気がひけるので、さっさと用事を済ませてしまおうと

自然と足が速まった。

体育館からは、明かりが漏れていた。

（だいたい、どの部活もテスト前で休みだっていうのに、何やってんのさ、アイツは。）

イライラしながら、サトセンから預かった紙袋をブンブン振り回し中に入った。

吉田はそこにいた。

広い体育館の中でただ一人、黙々とバスケットゴールにシュートを放っていた。

声をかけようとしたが、思わず足がとまった。

吉田の伸ばした手から、すいっとボールが離れる。

瞬間、光にあたって透けた茶色の髪が、ふわっと浮いた。
ボールは綺麗な弧を描いて、まるで引き寄せられるかのよう迷いなくゴールにスポツと入った。
まるで、魔法をかけたみたい…。

(やっぱりすごいや…アイツ。)

と、吉田が私に気づいて振りかえった。
眉をしかめ、少し不機嫌そうに話しかけてきた。

「なんだよ。なんか用か？」

そういえば、吉田と話すのも久々な感じだ。
それもそうか。私がことあることに避けているんだから。

「サトセンがこれ渡せて…。」

こっちも負けずおとらずしかめっ面をして言ってる。
それを聞くと、吉田はめんどくさそうに、「こちらへのんびりと歩いてきた。」

「何なのこれ？カシヤカシヤいうけど…。」

「ああ、これ？気になる？」

出た！この意地悪な顔！

こういふ顔をさせたら、吉田は天下一品なのだ。

「…気にならない。」

ぶすつと押し黙った私に、吉田はなお不吉な笑いを顔いっぱいに広げる。

「俺とサトセンの交換日記。」

「え？ほんと…」

よ、吉田はそんな趣味があったのか！？

よりによって、あんな40過ぎのおっさんと何がおもしろくて交換日記なのだろう。

いつになく真面目な表情の吉田を見上げて、思わず情けない声で言った。

「吉田…。そういうのは、ピチピチの若い子とやった方が楽しいと思うよ？」

と、その時、吉田の表情が一瞬にしてくしゃくしゃに変わった。

「ぶあつは！…！ほんつと冗談通じないのな、お前つて。普通はわかるだろ。なのにアドバイスまでしてやがんの！ないない、ありえない！…！ひゃっひゃっひゃっ！…！」

そう言い切ると、これでもかとはかりに腹をかかえて笑い出した。

「…じ、じんのママ…っ！」

ええいつ!!何がおもしろいんだ!何がー!?

だから、コイツは嫌いなんだ。

いつも本当だか嘘だかわからないような事を言うんだから。

(もう絶対信じない。ああ、人間なんて信じないさ!)

私は、だんまりを決め込んでスタスタとその場を去ろうとした。

「バコン!」

「いつつ。」

後ろをむけた背中に硬いものがぶつかり、側をてんとボールが転がってゆく。

(…お前、今それをぶつけたな…。)

「兎玉もやらない?」

むっとして後ろを振り返ると、吉田はまだ笑ってる。

「やらない。」

もちろん、即答。

誰がやるもんですか!

「バスケ、嫌い?」

「嫌い。球技の中で一番嫌い。」

「へえ……。」

そう呟いた吉田の声は、聞き取れないくらいの小さな声だった。

「……吉田は、バスケット好きでしょ？」

「……。」

「なんで、やめちゃったの？知らないけど、結構、期待のエースだったらしいじゃない？」

吉田は、中学の頃バスケット部だった。

なぜ知っているかというと、昔一度だけ吉田の試合を見に行ったことがあるのだ。

その当時、他校のバスケットとは全く関係ない私たちにまで噂が届くほど、吉田のずば抜けた上手さとその容姿は有名だった。

当時のミスターな私の友達は、早速私を試合にひっぱっていった。

「ほんとにかっこいいんだって。瓜子も見ればわかるよ。」

そう言って、無理やり説得された。

試合は前半終って27対40、県内でもベスト4に入る位は実力のある我が中学のバスケット部は圧倒的な強さを見せ付けていた。

「なんで、吉田くんをださないのかねえ……。」

隣で友達が不満そうに呟く。
お目当ての吉田という人物は、前半控えてベンチに座っているらしい。

ピーッ！

後半が始まった。

と、コートを背の高い男が、ものすごい勢いでドリブルをしていく。

あれ、さっきまでいなかったと思うけど…。

なんでだろ？ 知らない人なのに、目が離せない。

「あれが、吉田くんだよ。」

友達がそつと教えてくれた。

そうか、あれがかの有名な…。

今までの鬱憤を晴らすかのように、次々と鮮やかなシュートを放っていく。

それがまた、おもしろいようにゴールに吸い込まれていくのだ。

ディフェンダーをかわし、すつと瞳をゴールに移す。

そして、すらりと伸びた手で軽くボールを突くと、綺麗な曲線が描かれる。

思わず、握っていた手に力が入った。

吉田がシュートをする姿は、綺麗だった。

結局あっという間に点差は追いついて、ついには吉田がいる中学が逆転大勝利を収めてしまった。

試合が終わった瞬間、体育館中がざわめき歓声が沸きあがって、

吉田はそのコートの中で満面の笑顔とともに右手を天井に突き上げた。

悔しいけれど、ただただその姿に圧倒されたんだ。

そんな吉田がバスケをやめて、高校が一緒だということを知ったのは、それから随分あとになる。

今まで、ずっと疑問に思ってきた。

あんなに輝いていた吉田が何故突然バスケをやめてしまったのか？

何故あの時のような笑顔を見せなくなったのか？

4・放課後の体育館(下) (後書き)

更新おそくなりました(汗)
どうぞ気長にお待ちください…

5・茶色の包み

長い沈黙だった。

うつむいたままの吉田は何も答えない。

私は少し後悔した。

やっぱり聞くべきじゃなかった…。

「それ、やる。」

不意に静けさを破り、吉田がサトセンの袋をポンと渡した。

「え、だって、これは…。」

「俺には、必要ないから…。」

「…で、何が入っているの？」

「さっき交換日記だって言ったじゃん。」

「じゃなくて、本当に!」

「知りたい？」

吉田はさっきと同じように意地悪な笑顔を浮かべて言った。

「知りたいの？兎玉は？」

ううっ。何やら悪い予感…。

微かに後ずさりをしながらも、好奇心には逆らえず頷く私。それを確認すると微笑み、じわりと近寄ってくる。

「な、なによ。」

声が上がると必死で押さえ、声を絞り軽く睨みつけた。

吉田は全くお構いなしに近づいてきて、そして耳元で囁いた。

「エ・ロ・ビ・デ・オ。」

うぎゃああああー！！

「変態、スケベー！！なんで、そういうもんが好きなのよおー！！」

「しゃーねえだろ？男なんだから。あ、なに？それとも一緒に見る？」

「ば、ばーか！あほんだらっ！このゲテモノ吉田！！そんなんだから万年アホなのよっ！！」

「わかった！！ビデオが駄目なら…。よし、兎玉！今から本当に試してみるか？」

ぬけぬけとそう言って、奴はウェルカム！とばかりに両手を広げた。

「なっ！ふざけんあつ！！」

「冷たいなあ。俺たち、一応、付き合ってるらしいじゃん？これくらのスキンシップ当たり前だろ？」

茶目つ気たっぷりにウィンクする吉田を見たら、どつと疲れが出た。

…さっき一瞬でもコイツが綺麗だと思った私が馬鹿だった…。
やっぱりコイツはアホ以外なんでもない。

「いつ、誰が、付き合ってるんじゃああ！！いい？この際はつきり言っておくけど、あの時のことは不慮の事故ってことにしてあげるから、あんたもそのつもりでね！」

「あの時？ああ…俺が抱きしめたってやつか？」

「露骨に言っな！」

「なんだよ。結構ドキドキしてたんじゃないの？お前って男に疎そっつだもんな。」

コイツ…やっぱり嫌いだ。

黙って睨みつけ、足元に転がっていたボールをおもむろに拾い上げた。

そして…。

バコンッ！

「いつてえ。何するんだよ！」

力いっぱい投げたボールは、まんまとにやにやしていた吉田の顔に的中した。

「うつさい！どーせ男に免疫なんてないわよ！！だからあの時、別に吉田じゃなくてもドキドキしたんだから。あんたなんか全然関係ないんだからね！」

あゝなんでこんなに腹がたつんだろ。

目の前の吉田が、少し驚いた顔をしている。

自分が何を言ってるか分からなくなってきた。

（あゝもうやめた、やめた。アホらしい）

ドタドタ床を踏み鳴らし、私は体育館を足早に去った。

このとき後ろで吉田が吐いた「アイツ、俺に惚れてんのか？」という言葉は全く聞こえなかった。

家に帰ると、自分の過ちにいち早く気づいてしまった。

吉田が「エロビデオ」と称した怪しげなものを持って帰ってきてしまったのだ。

時はすでに遅し。

机の上に無造作にボンツと置かれた茶色の包みを、腕組みをしながらにらみ付けた。

だいたい、なんで男は「エロビデオ」が好きなのかしら？
あんなもの見て、楽しいのかあ？

そう思いつつも年頃の乙女としては少し興味があった。

「…確認するくらいなら、いつか。いらないうって言ってたし。」

誰に言うともなく呟いて、袋から取り出した。

でも実際、それは「エロビデオ」なんかじゃなかった。
いや、ビデオはビデオなんだけど…。

（「俺には必要ないから…。」）

先ほどの吉田の台詞が思い出される。

ほんとに、いらなくなっちゃったのか。

吉田にとって大切なものではないんだね。

なぜかわからなかったが、心がちょっとさびしかった。

サトセンから渡されたビデオのタイトルには、『吉田ノ練習試合ノ
中学選手権』と書かれていた。

5・茶色の包み(後書き)

吉田は天邪鬼です(笑)

6・大事な思い

返そうと思った。

あれは、吉田が持っているのが一番良い。違う、吉田に持っていてもらいたいんだ。もう一回自分のプレーを見てほしい。

あの時の、私たちを魅了したシュートの数々を思い出してほしい。素直にそう感じる自分がいた。

あのビデオをまき戻して、ちゃんと見た。まぎれもない若い頃の吉田が写っていた。

今と違って、髪が短く、あどけない少年の顔をして笑う吉田が初々しくてちよつとかわいい。

私が初めて見たとき、そのものだった。

楽しそうにバスケットをする試合中の吉田が思い出される。

やっぱり、こうでなきゃと思う。

何があつたかわからないけれど、もう一度バスケットを取り戻してほしい。

そんな思いを一人ぐるぐる頭で考えながら、今日の授業をこなした。お昼休みになると、心配そうに香織が近づいてきた。

「どうしたの？今日変だよ、瓜子。なんか、授業中もうわの空だったみたいだし。」

香織に話そうか？

そんな考えがちらりと浮かんだが、やはり言うのはためらわれた。

吉田はこういう話が人に知られてしまうのは、きつと嫌がるだろうと思っただからだ。

笑顔でなんでもないと首を振ると、香織はもうそれ以上何も聞かなかった。

放課後、慌てて吉田の姿を探したが、すでにどこにもいなかった。

今日は一日このことばかり考えていたので、すかしをくらったような気持ちになったが、どこかでほっとしている自分が少々情けなかった。

吉田に会うのが怖かったのかもしれない。

彼に会ったって、何を言えればいいのかはわからないし、説得する自信はない。

(だいたい私には、関係のないことじゃん。これは吉田自身の問題なんだから関わらないほうがいい。)

心の中ではわかっているけれど、それでも気になってしまう。

この時ばかりは自分の人の良さを恨めしく思った。

あんなに迷惑をかけられた奴なのに、何故かほっとけないのだ。

(……また、今度にしよう。)

ビデオの入った茶色い包みをそっと抱きしめ、はあく〜と長い息を吐

いた。

「なにやってんだ、お前？」

突然、誰もいないはずの教室によく聞きなれた低い声が響いた。

思わず体が固まる。

「もう誰もいないぞ。早く帰れって。」

そういつて、その声の主はひょっと私の顔を覗き込んだ。

「ひゃっ!」

いきなりの度アップに、情けなくも声を出してしまった。

「なんだよ。化けモンが出てきたような顔をしゃがって。」

吉田広人はわけが分からないといった顔でぼりぼりと頭をかいた。

神様は意地悪だ。

今日はもう会えないと思ってすっかり油断していた。
心臓がものすごい勢いで暴れだす。

泣き出しそうな気持ちをこらえて、必死で言葉を探した。

「よ、吉田こそ、なにやってたのよ？ 捜したん…。」

はっと口に手をあてて、吉田をちらりと見た。
案の定にやりと笑っている。

「へえ、兎玉ちゃん、俺捜してたの？ なんだよ。早く言ってくれ
ればいいのに。」

で、なに？ 愛の告白？ 期待しちゃうなあ。」

そういつて、カラカラと笑った。

「んなわけないでしょ！ 誰があんたになんか。」

「なんでえ、放課後の教室に二人きりなんて、最高のシチュエーシ
ョンなのにな。」

ぶつぶつ文句を言う吉田を見ながら、先ほど咄嗟に隠した包みをぎ

ゆつと握る。

渡さなきゃ。

そのために、今日は吉田を探したんだから。

握りしめた手が汗ばんでくる。

大きく一回息を吸うと、少しは気持ちが落ち着いてきた。

「吉田に、渡したいものがあつて。」

「昨日のやつでしょ？いらね。」

意を決していった言葉を打ち消すかのように、即座に吉田はそう言つて微かに笑つた。

「後ろに隠した包みでしょ？」

「わかつてたんだ…。」

「だーって、あんなにわかりやすく隠されたんじゃない。」

「返すよ。あたしが持つてるものじゃない。」

教室に再び静けさが訪れる。

吹奏楽部が練習しているのだろうか、どこからかトランペットの音が微かに聞こえた。

「兎玉さ、中みた？」

「…づん。」

吉田はそっかともた少し笑って顔をあげ、今度はまっすぐ私を見た。

「あのさ。兎玉があれを見て何を思ったか知らないけれど、なんか考えすぎてるんじゃない？」

「えっ？」

「別にさ、俺、バスケなんて今どうでもいいの。」

吉田の言葉に、頭の中が真っ白になった。

「もう終わったことだし、関係ないの。」

これは、俺が決めたことであって、お前には関係のない話。もう一回バスケをやらそうなんて考えてるなら、余計なおせっかいだ。」

抑揚のない言葉が、吉田の口から淡々と吐かれる。

なんで？

なんでそんなこと言うの？

さもなんでもないかのように言い放つ吉田に、どうしてか心が苛立った。

「バスケなんて暇な奴らがやってればいいじゃん。俺はもう好きじゃないし

正直飽きたんだよ。」

「…。」

「わかった？もう、いい？はい、じゃこれで、この話は終わり。じや、帰ろうよ。」

腹も減ったしさ。」

鞆を手にした男は、いつもの様子に戻っていた。

「ふざけないでよ!!」

バシッ !!!

奴の背中に、思い切り例の包みを投げつけた。

悔しくてしょうがなかった。

「なんなのよ？あゝ心配して損した。こんな馬鹿、もうどうでもいいや。そだね、全然関係ないしね、あんたなんか。」

勝手に想像して、勝手に心配して、私、なにやってんだろう。

「余計なお世話でした。ああ、余計なお世話でしたとも。私の勘違いでした。あんた、本当はバスケが好きなんじゃないかなんて思った私が馬鹿でした。」

言いながら、あふれでそうな涙を必死で押しとどめた。

目の前が歪んで、吉田の顔がよく見えないけれど、きっと驚いた表情をしているのだろう。

「いらぬなら、自分で捨てなよ！ 私には関係ないんだから！」

もうだめだった。

荷物を取り、ダッシュで教室から逃げ出した。

やっぱり、嫌な奴。

吉田広人なんて大嫌いだ。

6 ・大事な思い（後書き）

やっと物語が動いてきた…かな？（汗）

7・隠された真実

それからもう1週間も吉田と喋っていない。

以前から私が喋りかけることはなかったのだが、今度ばかりは吉田もちよつかいをかけてこない。

あのビデオだつて返したことだ。

吉田がそれを捨てようとしてようと、知ったこつちやない。

そうは思うのだけれど、それでも心の中で気にしてしまう自分が情けなかった。

「ガンッ!」

「ご、ごめんなさい。」

考えながら歩いていたら、人にぶつかってしまった。

「おー。兎玉。渡してくれたかあ?」

その声に驚いて顔をあげると、諸悪の根源、サトセンだった。

「…渡しましたよ。」

この人のせいで余計なことをしてしまったと思うと腹ただしくて、つい口調がきつくなってしまう。

「…兎玉、ちよつとつきあえや。」

すると、サトセンがいつになく、やさしい調子で声をかけてきた。

「私、年上は好きじゃないんですけど。」

今は話していたくなくて、適当にあしらったつもりだったが、サトセンは一瞬きよとんとしたあと、勢いよく笑い出した。

「ふー。お前おもしろい奴だなあ。そんなところが、吉田は気に入ってるんだなあ。」

少し出っ張ったお腹を擦りながら、楽しそうにそう言った。

「そんなことないです。私は吉田に嫌われてるんです。」

「吉田が？お前を？」

「…そうです。」

「誰がそんなこと言った？」

咄嗟に、関係ないと言われた場面が頭の中にリフレインされた。

「別に…そんな気がするだけですけど…。」

「お前はそれじゃ不服そうな顔をしとるな？兎玉は、吉田のこと気に入ってるんだな。」

「そ、そんなんじゃないです！」

いきなり変なことを言われたので、思わず大声をだしてしまった。

周囲の人が不思議そうに私を見るので、今度は聞こえないように小さな声でそつと話す。

「そんなんじゃないです…ただ…。」

いけない。目がぼやけて来た。

どうやら最近、泣き上戸らしい。

泣くまいとして無言になってしまった私の頭を、サトセンはあやす

様にポンポンと軽く触れた。

「放課後、体育館に来れるか？」

そつと言われたその言葉に、私はただ頷くことしか出来なかった。

放課後の体育館…。

確か1週間前のあの日もここにいたんだっけ。

そう思うとあまり良い気持ちはしない。

とりあえずサトセンと約束をしてしまったので、行くしかない。
重い足取りで体育館へと向かった。

バーン、バーン

本来なら誰もいないはずの体育館からボールをつく音がする。

（サトセン、バスケでもしてるのかな？）

しかし、あの酒太りのおっさんがバスケ部の顧問っていうこと自体が信じがたい。

（だいたい体が動くのかねえ。）

のっしのっしと地響きを立てながら走るその姿を想像して思わず笑ってしまった。

それにしても、用事とはなんだろう？
やっぱり吉田に関する事なのかな？

そんなことを考えながら、隙間からつつすら明かりが漏れる体育館の扉に手をかけた。

バーン、バシツ。キュツ。

刹那、目の前の光景に目を見開いた。

なに、どういうこと？

私が約束したのは、サトセンなわけで、なのに、どうして？
なんでまた、ここに吉田広人がいるわけ？

あの日のように、軽やかにステップを踏み、顔を上げまっすぐゴールを見据えて
放ったボールはまるで意思を持つかのようにゴールに吸い込まれていく。

そんな顔しないでよ……。
バスケットが好きでしょうがないって顔しないでよ。

「アイツ、うまいよなあ。」

ふいに肩に手が置かれ、驚いて振り返るとサトセンが吉田にじつと視線を注いでいた。

「アイツのプレーを初めてみたのは、中学の県大会予選のときだよ。すごい奴がいるって聞いてたから、様子を見に行っただ。」

顔は知らなかったけど一目でわかったねえと、サトセンは腕組みをしたままにやりと笑ってみせた。

「なんせ、一人だけ抜きん出てたからなあ。高校生とやっても劣らない技術を持つてたよ、ほんと。俺は一目ぼれしちまって、うちの高校に来い、絶対日本一にさせてやるって意気込んで勧誘したのよ。そしたら、あいつなんて言ったと思う？俺が日本一にさせてあげますよ、だと。まいったねえ。久々にゾクゾクしたよ。こいつは本物だと思ったんだ。」

サトセンは本当に楽しそうに話していた。

「でもあいつさ、怪我したんだ。うちの部に入ってからすぐに。運が悪い事故だったんだよ、と少し声を曇らせた。

「…あいつの妹さんがボールをおいかけて、車の前に飛び出したんだ。で、それを庇おうとして飛び出した吉田も事故に巻き込まれてね、右足を複雑骨折しちまったんだ。」

「…その怪我で吉田は、バスケが出来なくなっただんですか。」
私が訊ねると、サトセンは首を振った。

「いや、吉田の怪我は、たいした事ではなかったんだよ。」

「じゃあ…。」

「助からなかったんだ…妹さんは。即死だったらしい。」

冷たいものが背筋をつうつと流れ落ちる。

「あれから、吉田は責任を感じて、バスケが出来なくなってしまったんだ。」

そうだったんだ。

吉田はバスケットがやりたくないわけじゃない。
できなかつたんだ。

言葉が思いつかず、しばらくの間沈黙が続いた。

バシツ、シュツ。 ガコンツ。

吉田がシュートを放つ音だけがたんと響く。

あたしは、何を知っていたのだろう。

吉田の気持ちなんてなにも考えずにバスケットを続ける、なんて言っ
た自分を恥じた。

無神経もいいところだね。

「お前さ、あいつの心のリハビリ手伝ってやってやれ。」

え？

サトセンの言葉がずしりと背中に響く。

「俺はそれでもあいつにはバスケットが必要なんだと思う。お前、背中
押してやれや。」

「で、出来ません。私、もう失敗しちゃったんです。もう吉田に嫌
われちゃったんです。」

そして、ビデオの一件についてサトセンに話した。

話しながら自分のおろかさを改めて認識し、いたたまれない気持ち
になって唇をかみ締めた。

「兎玉、あいつに言ったのか、ほんとにバスケットが好きなんじゃないか、って。そうかあ。」

言い終わるか終わらないかのうちに、サトセンは静かに笑い始めた。私は驚いてサトセンを見つめた。

「プツ。悪い、兎玉。お前あんまりにストレートだからさ。そういうところが吉田は気に入ってるんだろ。あ、おもしれ。やっぱ、お前しかいないわ。うんうん。」

「なに一人で喋ってるんですか……。」
「いやいや、俺は決めたのよ。吉田のサポート役は兎玉。お前で決定じゃ。」

「だ、だから、言ったでしょーが！私は出来ませんって……！」

サトセンは細い目を更に細めて、話つづける。

「あの姿みて、吉田がほんとうにバスケット嫌いだと思うか？」

「……。」
「吉田にバスケット、やってもらいたくないか？コートであいつのシュート、見たくないか？」

「……ずるい。そんなこと言われたら、選択の余地はないじゃないか。」

私の首を縦に振る様子を確認して、サトセンはにっと笑っていった。

「この話は決まり、な。」

7・隠された真実（後書き）

サトセン、なかなかの曲者です…。

8・勝負

サトセンの奴、あれだけ人を煽っておきながら、具体的な作戦は何一つ告げていかなかった。

(自分で考えろってことか?)

うんうん唸ってみたが、ない頭を逆さにしても考えは浮かんでこなそうだった。

仕方がない。

実行あるのみ、だ。

教室にいた標的は友達と何か喋りながら笑っていた。息をひとつ吸って、大声で叫ぶ。

「吉田ああ!!!!」

吉田はちらりとこちらへ顔を向けた。

「なんだよ。」

「用があるからこっちこい!」

「お前が来いや。」

「...。」

ふっ、しょうがない。ここは百歩譲って行ってやるっ。

ダンダン音を立てて大股で歩き、なんなく不機嫌そうな吉田の前にとどり着いた。

「で、なにさ?」

いつの間にか、クラス中の輪の中の中心にいた。誰もに興味深そうに私達を見つめる。

（構うもんか。これから児玉瓜子、一世一代の恥をさらします。」
めんなさい、お父さん、お母さん…。」）

心を落ち着かせるためにとりあえず深呼吸をして、そして思い切っ
て言った。

「今度の日曜日、デートしよう。」

あゝ言ってしまった。

好きだった人にも言ったことないのに…。

吉田はほんとうに驚いているようだった。

椅子から半分ずり落ちている。

そして、やっこのことで口を開いた。

「ひさびさに話したと思ったら、なんの冗談だよ？だいたい俺ら喧
嘩してたんじゃないっけ？」

「いいの！とにかくわかった？空けといてよね。」

真っ赤になった顔を隠しながら、いそいそと集団の輪から逃げ出
した。

誰がどう思おうと今はよかった。

吉田さえ来てくれれば。

そして、とうとう約束の日曜日がやってきた。
待ち合わせは、正午12時。

吉田がほんとうに来るかはわからなかった。
いや、来てくれるだろう。

この日のためにいろいろ計画を練ってきたけど、こればかりは信
じるしかなかった。

「おい、来てやったぞ。」

「うわっ！！」

「……てめー、人を幽霊みたいに。お前が誘ってきたんだろ？」

だ、だっていきなり背後から出てくるんだもん。
まだ心臓がばくばくいっていた。

「で、なんなのさ。やっと俺の魅力に気づいたわけ？しっかし順序
が逆でねえの？」

ほら、普通は愛の告白とかからでしょ？なのにイキナリ大声でデー
トのお誘いなんてさ。

俺は耳を疑ったよ。」

にやにやしながら話しかける吉田の野郎に一発かましたいところだ
ったが、これからの計画のためになんとか左手で右手こぶしを押しさ
えつける。

(あんにやるめ、余裕なのも今のうちだぜ！)

「なんでもいいから、ほら、行くよ!」

「だから、どこに?」

「いーから黙ってついて来い!」

無理やり吉田を引つ張ってきたのは、バスケットボール高校選手権都大会の予選だった。

白熱したゲームだった。

思わず任務を忘れて没頭してしまっただくらいである。

隣の吉田は始終無言を決め込んでいたけど。

お次は、バスケット専門店。

で、次はバスケット映画。

本物かどうかはわからないけれどマイケルジョーダンのサインが置いてあるポスターだらけの喫茶店で一休みし、

最後に我が高校の体育館にたどり着いた時には、すでに日は落ちてあたりは暗くなっていた。

途中で「そういうことか。」と吉田がぼやいてたけれど、気にしない、気にしない。

「お前さー、あからさますぎ。」

始終ぶすぶすたれた様子だった吉田が渡したジャージを手にしてやっと一言もらした。

「わかったんなら、さっさとそれ着てよ。」

「これ着て、なに? バスケットでもしろって?」

「そう、私と勝負するの。」

はあと大きく溜息をついて、吉田は恨めしげに私を睨んだ。

「お前、サトセンに、なに吹き込まれた？」
「え。」

図星だなと呟いて、やれやれとばかりに奴は冷たい床にどっかり座り込む。

「俺はバスケ、やらないよ。それは前にも言っただろ。もうやりたくない。このことは俺の中で完結してるんだ。」

「やりたくない、じゃなくて、出来なかつたんでしょ？」

私の一言に吉田が目を開く。

「怖いんですよ。バスケやるのが。事故のこと思い出すから？そうかもしれない。でも、完結なんかしてない。吉田はいつも迷ってる。」

わざと吉田を挑発した。

「私のエゴだと思ってくれていいよ。吉田のためなんかじゃない。私が吉田のバスケを見たいの。」

震える声を懸命に抑えた。

生意気だっと思われたっがいい。
嫌われたっがいい。

吉田がこの勝負にのっけてくれさえすれば。

「わかった。やる。」

しばらくして諦めたように吉田が言葉をはき捨てた。

「ルールは簡単。私が一本でもゴールを決められたら、吉田はまたバスケットを始める」

吉田は黙って頷いた。

そうそう、それでいい。

「ただし条件がある。」

条件？

「俺が勝ったら、なんでも言うこと聞いてね、瓜子ちゃん？」

にやっと微笑む悪魔の笑顔に、背筋がぞっとした。

こいつ、本気だ。

でも、私だって負けられない。

思いっきり吉田をにらみつけた。

「いいよ。なんでも言うこと聞く。」

「よし。じゃ、行くぞ！」

吉田は想像以上にうまくいった。

これでもみっちり練習をつんできたつもりだったが、足元にも及ばない。

そりゃそうだ。相手は将来有望といわれた元バスケット選手。それに対してこっちはしがない女子高校生。いくら相手が本調子じゃなくても、月とすっぽん以上の違いは明らかだ。

「どーした、兎玉。あんだけ啖呵切つといて、そんなもんかよ。」

余裕の表情でコートに立つ吉田。

すでに30分経過してるのに、シュートさえうたせてもらえない。息が切れて、スタミナだけがとりえの私もそろそろ足がおぼつかなくなっていた。

こんなことなら、もっと真面目に体育の授業を受けてればよかったと思うのは言うまでもない。

それでも負けるわけにはいかない。

歯をくいしばり、ボールを床にバウンドさせる。

「まだまだ！」

きつと吉田を見据えた。

そうだ、あいつのシュートを真似ればいい。目をつぶった。

神経を集中させて、懸命に吉田の姿を頭に思い描く。

何度も見たから、もうすっかり脳裏に焼きついている。

こつボールに手をそえて、軽くジャンプし、その瞬間ぱつと手を離す

シュツ。

入って。

お願い。

タン、タン、タン…。

ボールが床にバウンドする音だけが広い体育館にこだまする。

8・勝負（後書き）

児玉さん、いくらなんでも無謀ですって。

9・ほんとうに好きなもの

「狙いはよかつたんだけどな。」

吉田が力が抜けて座り込んでしまった私の目の前にぐいっとしゃがみこんだ。

「ゴールに届いてないんだな、これが…。」

うそ…。

全身の力が抜けた。

「もう、あきらめろって。」

「いやじゃ。まだ、やるっ痛ったああ!!」

立とうと膝を立てた瞬間、右足に鈍い痛みが走った。

「児玉！大丈夫か!？」

「無理すんなよ。」

吉田が近くのコンビニにでてきてくれたアイスノンを、腫れた右足に巻きつけた。

「あゝあ、こりゃ、捻挫だな。当分動かしたらいかんよ。」

「…。」

くやくして言葉がみつからなかった。
肝心な時にどうして。

「…お前はどーして、そんなに一生懸命になれるのかなあ。」

俯く私の隣で、吉田がごろりと床に寝転び、天井を見上げながら言った。

「俺なんて、関係ないだろ？ついこないだまで関わるの嫌がってたじゃん？」

「…吉田のバスケ、好きだから。」

「俺のバスケ？」

「うん。さっきのシュートも吉田をまねしようと思ったんだけど。」

吉田みたいにはうまくいかないみたいと、ぎこちなく笑って言った。

夜の体育館はすっかり冷え切っていて、二人の間に落ちる沈黙がより一層寒さを増長させる。

「さっきの、結構凶星。怖い。バスケやるの正直怖いよ。」

ポツリポツリと吉田が言葉を漏らす。

「…妹のこと、やっぱり思い出す。あの事故の時、頼まれてバスケツトを教えてあげてたんだ。でもアイツ、下手くそでさ。手がちっちゃくてまだうまくボールが扱えなかったんだ。で、俺はそのうち自分の練習に没頭しちゃって、妹をほったらかしにしてて…あいつ

がボールを追いかけていったことにすぐには気づかなくて…。それで、あんなことになっちまって。…バスケやるたんびに思い出す。」
情けないよな、そう言ってカラカラ笑った。

一言一言が胸にずしんと響いた。
大きな吉田がちっちゃく頼りなげに見えた。
でも…。

「でも、吉田はバスケを捨てれなかった。吉田は、バスケが好き…
なんでしょ?」

隠したって無駄だよ。

あんたのバスケしてる姿から伝わるんだから。
好きで好きでしょうがないって思いが…。

吉田は驚いた顔をしていたけど、すぐに遠くを見つめるようにして
つぶやいた。

「…そつかあ、俺はバスケが好き…なのかあ。」
自分自身に言い聞かせるように、その意味を確認しながら、ゆっくりと。

「うん…好き…なんだろうな。」

小さい声で、でも、はっきりと、吉田は言った。

その瞬間、私もわかった。

好きなんだろうな。

この人のことを。

どれくらいそうしてたかわからない。

沈黙を最初に破ったのは、吉田だった。

「お前、さっきの勝負で言ったこと、覚えてる？」

ギクツ。

「なあ。負けたらなんでも言う事聞くて、言ったよな？」

「そ、そんなこと言ったかな？」

「しかと聞きました。この耳で。さあて、何してもらおっかな？」

「

何やら企んでるような笑みを浮かべてじりじりと近づいてくる吉田に、ものすごおーい不吉な予感がする。

こいつがこんな顔をするときは、なにかよくないことが起こる前兆だ。

「…さっきまでのしおらしい吉田はどこいったんだ！！ 夢かまぼろしかっ！？」

「さてねー。俺も健康な高校男児だからねえ、兎玉ちゃん。」

角に追いやられ、逃げ場がない私に容赦なく吉田は距離を縮めてくる。

こ、怖い…。

吉田が、いつも以上に悪魔にみえた。

誰もいない体育館に男と女…。

いやあ、こんなベタな設定、少女漫画でもありえないな。

おいしすぎなシチュエーションってわけか。

わはは、これで高校生活の思い出のページができるってことね。

…。

いかん、こんな逃避行してる場合じゃない。

乙女の貞操の危機じゃ〜いつ〜!!

「ま、負けてないもん。まだ勝負はついてないじゃんか!今回は、
ね。見逃してつて。」

「だめ。」

必死のお願いにも耳を傾けることなく、いつになく真剣な面持ちの
吉田の前髪が私のおでこに触れるくらい接近してきた。
ぎよええええええええええ!!

「!?!?!」

咄嗟に側にあつたバスケットボールを前に突き出した。

「てめ。」

ボールにちゅーをかましたアホ吉田はぐいつと口元を拭う。

「あなたの愛しのバスケットボールだよ。」

なんとも間の抜けた表情の吉田を見上げて、私はにこっと笑ってみせた。

飛びきりの極上スマイルで。

まだまだ吉田になんか負けてられないもんね！！

9・ほんとうに好きなもの(後書き)

物語りもいよいよ佳境に入ってきました。
更新遅くてすみません(汗)

10・始まりの時

それから1カ月後。

体育館いっぱい声援やら、黄色い声やらが溢れかえっていた。

隣で香織がなにやらボソボソ言っている。

「なに、香織？ うるさくてよく聞こえない」

「たいしたもんだって、言ったの！ あの吉田にバスケやらせるなんてさ。アイツがうちのバスケット部に入ったおかげで今まで県大会どまりだったのにイキナリ決勝だよ？ 吉田ってば、すごすぎ。」

「それに、この歓声もね。」

周りを見れば、そのほとんどが女だ。
横断幕まで掲げちゃって、このご声援ぶり。

「さぞかし、吉田が喜ぶだろーね。」

「あら、嫉妬なんかしちゃって。かわいい。」

「だーっ！ 誰が嫉妬なんかっ！！」

私があわあ喚いていたら、吉田が同点シュートを決めたらしい。
よりいっそうの歓声が辺りをつつむ。

やっぱ、かっこいいわ、アイツ。

ほーと香織に聞こえないように、溜息をついた。
やっぱり吉田は目立つ。

力強くドリブルし、次々と相手ディフェンダーを抜いていく。
ほら、また決めちゃったよ。

あれでブランクがあったなんて信じられない。

と、コート上の吉田がいきなりこっちを見た。

口パクで何か言ってる。

んん？

か、っこ、い、い、だ、ろ。

…。

思わずこめかみを押さえ、頭をかかえた。

ばかだ、アイツは…。

知ってたけどさ。

そっぴいっぴも頬が緩んでしまう自分が悲しかったけれど。

結局その試合は吉田の大活躍のおかげで、かなりの大差で勝利を収めた。

「なあなあ。俺のシュート見ただろ？ かつくいーだろ？ 惚れた？
惚れ直した？」

いつになく饒舌な吉田が歩調を合わせ、並んで歩いてくる。

「あー、はいはい。わかったからさあ。なんであんたは私と帰って
るのさ。今日はこれから祝賀会でしょ？ 早く行きなつて。」

「いいの。児玉ちゃんと祝杯あげるから。」

にっこり笑って言い返す男の笑顔に不覚にも見とれてしまった。
あゝこれで何人の女をだましてきたんだ、この男は…。

シャワーを浴びたらしく、吉田の髪は少し湿っていた。
それがいつもと違って少しドキドキする。

「兎玉には感謝してる。」

突然、吉田が驚くような言葉を吐く。

「俺、バスケもう一回やってよくわかった。やっぱり、好きだわ。ほんと。」

そして、いつもの茶化すような感じではない、まっすぐな瞳で私を見つめる。

「ありがとう。」

心臓の動きが一段と高まる。

吉田の瞳に絡めとられているかのように、体の自由がきかない。
何か変だ。

いつもと違う空気を払いのけるかのように
咄嗟に手をのばし、吉田のおでこにぴたっと手を当てた。

「熱、あるんじゃない?」

「ああ?」

一瞬驚いて、そして吉田は苦笑した。

「…お前って、ムードないねえ。」

「な、なによ！」

「今のシーンはさ、2人見つめあって、そしてあつつい抱擁をする場面じゃないのさ？」

「もー、児玉はほんっと、男心がわかんない奴だねえ。」

おちゃらけて言った吉田の言葉に、かあつと顔が熱くなった。

「変態！ テレビドラマの見すぎだっ！！！」

「おっ、顔が赤いねえ。いや〜かわいいんだから、児玉ちゃんは。」

「…もう、帰るわ。」

馬鹿とつきあうと私まで頭がおかしくなりそう…。

そう思っ、くるつと後ろを向き、スタスタと足を進めると、

「こっだま〜！！！」

背後から大声で呼ぶ吉田の声が聞こえ、思わず顔をしかめた。なんだよ、そんな大きい声出さなくても、聞こえてますって。

「バスケやって、もう一個気づいたんだけど。俺、お前のこともやっぱ、好きだわー。」

「え。」

「すっきだー。めっちゃ好きー！！！」

周りにいた人たちが、面白そうに私をじろじろ見つめる。わかった。わかったから…。

だから、公衆の面前で、そんな大声出すなああああ！！！！

きびすを変えて、ずいずい吉田にむかって進んだ。

「ちょ、ちょっと、わかったから、アホ吉田！！声大きいって！！」

と、次の瞬間、吉田の大きな体にふわっと包み込まれた。

耳元で、聞こえる息づかい。

熱い体温。

低い声で、奴がつぶやく。

「バスケも児玉も、あきらめない。」

吉田は、汗と石鹸のにおいがした。

こんなに胸がどきどきしてるけど、聞こえてるんだろうか？

それは、ちょっとくやしいかも。

「バスケットボールも、児玉スイカも、丸いよな。俺、丸いものに弱いのかなあ。」

しばらくしてから、吉田が嘆いた言葉はしっかりと耳に届いた。

…私も丸いっていいたいわけ？

「…喧嘩売ってるの？」

「いや、別に。」

「…ちょっと。そろそろ離してよ。」

「いやだ。あつたかいんだもん。」
「恥ずかしいでしょうが。皆見てるって。」

巻かれた腕をそっと離そうとしたがびくともしない。

「チューしろ。」

「!???」

「チューしてくれたら、離す。」

「なに、言ってるのよ!?!」

「お前、勝負負けただろ？ 忘れたとは言わせん。俺は勝ったのにバスケやったんだから、それくらいはしてもらわないと。この前は未遂に終わったし。」

「そ、そんなのなしよ、なし!?! いーじゃん、丸く収まったんだからさ、ね。」

「よーくない。」

吉田の顔がぐいっと近づいた。

長いまつげの一本一本がよく見える。
思わず怖くて目を瞑った

!??

その瞬間おでこに、そっと触れるか触れないかくらいの微かな温かさを感じた。

拍子抜けして、ぱっと吉田を見上げる。

「今日はこれで勘弁してやる。」

そうして、目を細めて、くしゃくしゃと私の頭をなでるその笑顔に、再び心臓が波打つ。

ずるいよなあ。

小さくつぶやいて、そっと笑った。

こんなめちゃくちゃな奴だけど、好きになっちゃったんだからしょうがない。

覚悟を決めて奴の背中を追いかけた。

10・始まりの時（後書き）

すみません。やっと終わりました…。

終って読み返しても恥ずかしい。くうう。

やっぱり長編って下手くそな私です。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2589d/>

君と西瓜とバスケットボールと

2010年10月20日12時46分発行